

漢詩のきまり 確認テスト（絶句・律詩・押韻・対句） | 定期テスト対策 | 誰でも古典塾 解答・解説

問1 五言絶句／一句が五字で、全部で四句から成るため。

問2 暁・鳥・少／第二句末「鳥」・第四句末「少」に加え、第一句末「暁」も韻を踏んでいる。五言の詩の押韻は原則として偶数句末だが、『春暁』は第一句末でも韻を踏む「首句入韻」の有名な例で、押韻字は「暁・鳥・少」の三字とするのが教科書の標準である。

問3 第三句／転句。第一・二句で春の朝のようすを述べ、第三句「夜来風雨声」で前夜の風雨へと場面が転じている。

問4 イ。春の朝のこちよ眠りと、あちこちで鳴く鳥の声を描きつつ、最後に前夜の風雨で散った花を思いやっつて、過ぎゆく春を惜しむ気持ちがよまれている。

問5 五言絶句／一句が五字、四句から成る。

問6 滅・雪／第二句末「滅」と第四句末「雪」が押韻している（偶数句末）。

問7 （雪の降る）冷たい川の上で、（老人が）ただひとり、雪の中で釣りをしている。

問8 イ。第一・二句で鳥の姿も人の足跡も消えた雪景色を描き、第三・四句で蓑と笠をつけた老人がただ一人小舟で釣りをするさまを描いている。

問9 五言絶句／一句が五字、四句から成る。

問10 流・楼／第二句末「流」と第四句末「楼」が押韻している（偶数句末）。第一句末「尽」は韻字ではない。

問11 対句（ついく）。二つの句で、語の種類や組み立てを互いに対応させる表現技法。

問12 千里のかなたまで見きわめたいと思って、さらにもう一階分、高い楼の上へと登る。

問13 （例）目標をいつそう高くもち、努力を重ねて、より高い境地をめざすべきだ、という向上・進歩の教え。現在でも「更に上の段階をめざす」意で広く用いられる。

問14 絶句…四句 律詩…八句。

問15 七言（しちごん）。

問16 イ（第二句と第四句）。五言の詩は原則として偶数句末で押韻する。

問17 第一句（の末字）。七言の詩では、偶数句末に加えて、ふつう第一句末でも韻を踏む。

問18 起承転結（きしょうてんけつ）。第一句＝起句、第二句＝承句、第三句＝転句、第四句＝結句。

問19 「白日」←→「黄河」／「依（山）」←→「入（海）」／「尽」←→「流」。「白日／依／山／尽」と「黄河／入／海／流」が一語ずつきれいに対応している（名詞←→名詞、動詞←→動詞）。

問20 頷聯（がんれん）と頸聯（けいれん）。律詩は二句ずつ四つの聯（首聯・頷聯・頸聯・尾聯）に分かれ、このうち頷聯（第三・四句）と頸聯（第五・六句）を対句にするのがきまりである。

問21 唐（とう）。孟浩然・柳宗元・王之渙はいずれも唐代の詩人で、漢詩は唐の時代に最も盛んになった。